退役曹長 日本人男性の命救う

Retired Airman saves Japanese life

February 2, 2016

Original text by Airman 1st Class Delano Scott
374th Airlift Wing Public Affairs

他人の勇気ある行動について見聞きした時、その状況に自分を置き換え、もし、自分だったらどう対応できるだろうかと考えさせられる。冷静に、自身が積んできた経験に基づき、たとえ、己の命が危険にさらされたとしても他人のために尽くせればと思う。しかし、実際に緊急な事態に直面すると、咄嗟にどう自分が対応できるか予期できる人はいないだろう。

第374装備即応中隊に所属するロバート・シェンク氏

12月20日、第374装備即応中隊の派遣配置部に所属するロバート・シェンク氏は息子と娘を連れ、観光のため、青森に向かう細い道を車で走っていた。前日から23センチほどの積雪があり、走行が危険な状態となっていた。雪道はアイスバーンになっていて滑りやすくなっていた。シェンク氏の家族は、十分に注意しながらその道を進んでいた。その時、彼らの目の前に飛び込んできた光景を見てとっさに車を止めた。

「車が横にひっくり返っていた。急いで車を降りて助けに駆けつけた時には、横転していた車のエンジンから出火し炎上していた」とシェンク氏はその時を振り返った。

73歳の日本人男性が、車中に閉じ込められた状態になっていて、惨事的な状況は瞬く間に悪夢と化した。それでもシェンク氏は閉じ込められているその男性を救おうとした。その横転した車の元へ急ぎ、とっさの機転で炎に包まれた車に氷や雪をかけた。

「息子と助けに駆け寄ってくれた日本人の一人と共に、炎を消すために全力を尽くした。消火をしながら、車のドアのロックを解除し、車の中にいる男性を救出しようとした」とシェンク氏はその時を振り返った。

しかしながら、ドアはびくとも動かず、火はようやく落ち着いたものの、車内にいる男性の命は未だ危険にさらされた状態のまま、時が刻々と過ぎていた。

「ドアを開けるために車の上に飛び乗った。ドライブシャフトの上で身のバランスを取りながら、何とかドアを開くことができた。ドアが再び閉まらないよう片手で持ちながら、車内の男性を引っ張り出し、近くでサポートしていた日本人男性に引渡した」とシェンク氏は状況を説明した。

青森県の道路脇に横転した事故車両の現場で、交通整理をするシェンク氏の息子

車から救出した男性の命が一刻を争う状態でなかったことに安堵しながらも、シェンク氏は、車の上に立ったまま、携帯電話を息子に投げ渡し、事故にあった男性が必要な医療が受けられるように、また、この事故現場への救援を要請するため、「119」に電話するよう指示した。

救援活動が行われている間、その道路は大渋滞した。

「その道はとても危険な状態だった。道の北側の急な上り坂に、車が次々と押し寄せてきた。道が積雪や凍結で滑りやすい状態だったため、連鎖事故を起こさないためにも、通行の安全を確保することが重要だった」と記憶を蘇らせた。

シェンク氏は自身の車からブランケットを取り出し、事故に遭った男性の暖を確保した。そして、息子と共に、救助隊が到着するまでの約10分の間、通行する車の交通整理を行った。

シェンク氏は、米空軍に24年間従事した退役曹長で、空軍の訓練で培った知識がこの状況に遭遇した時に役立ったと語った。

「自分がどう対応するかなんて考えてもいなかったが、現役の空兵だった時に受けたサバイバル訓練、応急処置訓練、他の技術は未だ身についている。今回のような緊急な状況に直面した時も、これまで積んできた訓練を信じ、直感で行動にでることができた」とシェンク氏は述べた。

救助隊が到着してその場を仕切り始めると、シェンク氏はようやく胸を撫で下ろした。そして、シェンク氏の家族がその場を立ち去ろうとした時、事故に遭った男性ナカガワ・カズヨシさんが家族のもとへやってきて、命を救ってくれたことへの感謝の気持ちを述べた。

「彼は我々のとった行動にとても感謝してくれたが、私は、彼を助けることができただけで幸せだった」とシェンク氏は語った。

シェンク氏は、彼自身の身を危険にさらしながらも見知らぬ男性を救った。その事故がどんな展末になるか分からずとも、米空軍現役時代の行動指針と訓練に基づき、突然の事故にためらわず迅速に対応した。この話が意味することは、今日の訓練によって明日救われる命があるかも知れないということだ。